

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成27年 9月16日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 医学研究科 呼吸器外科学

職 名・学 年 博士課程3年

氏 名 中 西 崇 雄

助 成 の 種 類	平成27年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	第16回世界肺癌学会議		
発 表 題 目	ビンレルビン耐性肺癌におけるFAパスウェイの役割 (Vinorelbine Resistance in Lung Cancer; Role of Focal Adhesion Signaling Pathways)		
開 催 場 所	アメリカ合衆国コロラド州デンバー コロラドコンベンションセンター		
渡 航 期 間	平成 27 年 9 月 6 日 ～ 平成 27 年 9 月 13 日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	250,000円	
	使用した助成金額	250,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	デンバー往復航空券	160,600円
		デンバーホテル滞在費	6,3989円
学会参加費		58,155円	
上記費用のうち25万円分に助成金を使用			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 貴財団からの助成のおかげで経済的な不安なく海外での発表に参加することができました。非常に感謝しております。費用に関しては若干足が出ましたが、妥当な助成金額であったと考えています。また助成に関する手続きも比較的簡便であり、その点についてもとても好印象をもちました。可能であれば今後も貴財団からの助成をうけたいと考えていますが、一方で私たちの研究室でも多くの人に貴財団の助成を紹介し多くの人が助成を受けることが出来れば良いと考えています。		

## 成果の概要

医学研究科 呼吸器外科学

大学院 3 年 中西崇雄

アメリカコロラド州デンバー、コロラドコンベンションセンターにおいて 2015 年 9 月 6 日～9 日にわたって開催された大 16 回世界肺癌学会議に出席、ポスター発表を行ってきたので、その概要につき報告する。

我々は本学会において、細胞障害性抗癌剤であるビノレルビンの耐性化の一因が **Focal Adhesion Pathway** とくに **Src** からのシグナルであり、**Src** を阻害することにより耐性化が改善することを報告した。また耐性化の主要な原因として **ABCB1** の活性化も以前より指摘されているが、**Saracatinib** という **Src** 阻害剤が **Src** と **ABCB1** の両者を阻害する作用があるため、同薬が今後薬剤耐性肺癌の有用な治療候補であることを示した。

本学会においても薬剤耐性は主要なテーマであるため、薬剤耐性に対する多くの報告がなされたが、そのほとんどが分子標的治療薬に関するものであった。分子標的治療薬については近年多数の **Driver mutation** を対象にした薬剤が発表されており有力な治療薬であることには相違ないが現時点では細胞障害性抗癌剤が治療の柱であることに変わりなく、そういった点で医療先進国ではなく東南アジア諸国からの参加者から研究内容に関する質問があった。また他の薬剤耐性研究報告を一度にたくさんみることが出来、どのようなパスウェイに注目するのか、そのパスウェイの関与をどのように証明していくのか、どのような薬剤を併用していくのか、どのようにデータをまとめていくのかといった点で、自分の研究をすすめていくうえで大いに参考になる点を多数見出すことが出来た。

本学会では多くのテーマに関する発表があったが、主要なテーマは **EGFR** や **ALK** などの **Driver mutation** に対する阻害薬およびその耐性化に対応する第 2-3 世代治療薬に関することと、**PD-1/PD-L1** といったチェックポイント阻害剤の使用成績に関することであつたように感じた。上述の治療薬の発見、開発においては日本人の研究が大きく関わっており、国際学会に参加することにより改めて肺癌治療における日本人研究者の貢献度の大きさを実感することが出来た。学会会場にはそのような意識の高い日本人研究者が多数参加しており、日本人同士の交流を深めるのにも有意義であった。またデンバーはアメリカ有数のビールの産地であり、会場外での交流もはかることが出来た。

また、このような世界規模の大きな学会に参加することは、今までは紙面でしかみることのなかった著名な医師や研究者の発表を聞くことが出来るのも、大きなメリットである。外科部門でのセッションにおいては、そのような偉大な成績を残している外科医の手術に対する戦略、リスクマネージメントの考え方に触れることが出来ておおいに感銘をうけた。また研究面においては私の研究テーマである **Src** に関してレビューの執筆や **clinical trial** を行っている医師の発表を聞くことが出来、研究のデザイン、進め方、問題点の見出しといった点に非常にスマートなものを感じ、自分もそのように研究をすすめられれば良いなと思わせるものであった。

一方で自分の英語力の不足と不勉強を痛感させられる場面にも多数遭遇した。学会会場においても今まで自分が全く知らなかったテーマについても発表も多数あり、そのような発表こそ

理解し知識をつみあげようと思っはいるが、知らない事を英語で聞いていると、内容に全くついていけず、時差の影響もあって、不覚にも気が付けば次のテーマに移っていることもあった。英語力についても、最新の知見においても学会のレベルについていくにはまだまだ研鑽が必要と感じた。

もう一つ国際学会に出席して感じたことは、プレゼンテーションの仕方が優れているということだ。日本ではスライドの字面を追うだけの発表が非常に多いが、この学会では多くの発表者が、聴衆の側を向き、自分の言葉でユーモアを交えて話しかけている点が印象深かった。英語力の足りない自分としては、スライドの文字を追ってもらうほうが、理解しやすかった面もあるが、それでは聴衆をひきつける発表にはなりえないと感じた。

最後に本学会に同行し、指導、手助けや他の研究者との交流のセッティングを行ってくれた私の上司に謝意と、本学会への参加が非常に有意義であり、留学も視野に入れた今後の研究意欲をひきたてるものであったとを伝えたい。

このような学会に参加することに経済的な援助をして頂いた京都大学教育研究振興財団にも感謝をしている。国際学会への参加は経済的な負担が大きく、助成によりその負担を軽減できることは、国際学会参加への意欲を大いに向上させるものであった。